

担い手の大豆収量向上支援 ～排水対策の改善と適期は種の実践～

東近江農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

W農場は、東近江市愛東・湖東地域の大規模経営体で、水稻・麦・大豆を175ha栽培されています。大豆は「フクユタカ」という晩生品種を約30ha栽培されていますが、直近の収量は60kg/10a（平成30年）、80kg/10a（令和元年）と、地域の平均収量124kg/10a（平成28～30年度）を下回り、収量向上が課題となっていました。主な原因は、排水性の悪いほ場が多く、うね立て等の十分な対策が講じられていないこと、経営規模が大きいことから、作業が遅れ、「フクユタカ」のは種適期（7月）を逃していることと考えられました。そこで、①排水対策の改善と②早生品種の導入によるは種時期の分散を行い、150kg/10aの収量を目指すことにしました。

【普及活動の内容】

① 排水対策の改善

より高速で、かつ高くうね立てが可能な高速うね立て同時は種機の導入を提案しました。排水性の悪い地域での利用実績はほぼなかったことから、は種深やうね高を調査するなど、は種作業を支援しました。また、前耕で碎土率を確保する必要があったことから、農機メーカーと連携して手法を検討し、スタブルカルチ2回を基本として、麦稈の残存に合わせた作業をしていただくよう提案しました。

② 早生品種の導入による適期は種の実践支援

「フクユタカ」とは種時期が分散されるよう、6月中下旬からは種可能な「ことゆたかA1号」の導入をすすめ、約3ha作付けされることとなりました。「フクユタカ」は、7月の長雨により8月初旬のは種となったため、基肥施用や、は種量の増量を提案しました。



写真 「ことゆたかA1号」収穫作業

【普及活動の成果】

高速うね立て同時は種機の導入により、は種作業は約5ha/日進み、6月下旬には「ことゆたかA1号」のは種ができました。湿害の影響もなく、収量は約260kg/10aとなりました。また、「フクユタカ」は7月の長雨の影響では種が遅れましたが、栽培管理支援により約150kg/10aとなりました。全体の収量は、約160kg/10aとなり目標を達成できました。

今後は、高速うね立て同時播種機による排水対策技術の定着を図り、安定的な収量確保ができるよう支援を行っていきます。

◎対象者の意見

うね立てによる地表排水の重要性が実感できた。気象に合わせた栽培管理ができた点も良かった。さらなる収量向上に取り組みたい（W農場代表）。